エクアドル先住民運動 ── 参加と抵抗

アナ・マリア・ラレア・マルドナド／山　本　　誠・訳

エクアドルの政治社会の現場では、この十年間先住民運動が活発な動きを見せてきた。その事実は現行の国家開発モデルやそのモデルに連動する民主主義のスタイルに対し、深刻な問題を提起するものである。この先住民運動が問いかけ続けてきたのは、排他的で骨の髄までレイシスト的なエクアドル社会であり、そのエクアドル社会とは自らの歴史を認識せず、固有の多様性にも目を向けようとはしない、そして自らがつくりあげた同化モデル、統合モデルにおさまらない文化や世界観をもつ社会主体の存在を認めようとはしない社会なのであった。

＊　　＊　　＊

エクアドルの先住民運動が経験してきた歴史は政治的主体という役割を引き受けようとする社会的主体の構築プロセスに他ならず、そこで提起されている諸問題はこの国における社会変容という論点を分析する際には不可避の対象である。

【土地配分をめぐる闘争から多民族国家の構築に】

エクアドルにおける社会主体としての先住民運動の出現、その直接の契機はアシエンダ制の解体である。そこで生じた土地を求めての闘争には、地方組織の確立ということに加え、エスニックな要素をふんだんに抱えたアイデンティティ問題の再活性化という現象もともなっていた。また先住民が組織化していく過程において、教会や左翼系の政党、エクアドル国家、そして開発NGOが果たした役割も重要である。ただしそういった外部エージェントはそれぞれまったく異なる発想や目的、論理をもって関与しており、また後年になって先住民の運動が発揮することになる力を見て取ることもかなわなかった（cfr. Larrea y Muñoz, 2000: 3-5）。

そういった一連の組織は少しずつ成長し、地域的、全国的なレベルでの新たな代表制の形態をとるようになっていく。ローカルな歴史と組織化のプロセスが大きなスケールで一本化されていったのである。1972年にエクアドル・キチュア先住民連盟ECUARUNARI（Confederación de Pueblos de la Nacionalidad Kichwa del Ecuador）がアンデス高地（la sierra）に誕生し、1980年にはアマゾン地域でエクアドル・アマゾン先住民連盟CONFENIAE（Confederación de Nacionalidades Indígenas de la Amazonía Ecuatoriana）が、そして80年代初頭にはエクアドル先住民調整協議会CONACNIE（Consejo de Coordinación de las Nacionalidades Indígenas del Ecuador）がつくられ、これが1986年のエクアドル先住民連盟CONAIE（Confederación de Nacionalidades Indígenas del Ecuador）設立につながっていく。そして80年代が終わる頃には、エクアドル先住民連盟CONAIEがこの国で最も重要な先住民組織となり、土地をめぐる闘争や先住民の承認を求める闘争に向け、先住民の知識人グループを抱える自律的な執行部をもつまでになっていった。

1990 年の先住民蜂起では、長期にわたる先住民組織の進展ぶりをエクアドル社会の眼前につきつけることになった。その蜂起においてエクアドルの深層にある存在、つまり忘却されると同時に排除された国民としての姿を示しただけではなく、先住民には入る余地のないまったくの排他的な民主主義モデルに対して重大な疑問を投げかけ、さらに先住民を踏み台にしたり背を向けたり、あるいは無視してつくられてきた開発モデルに対しても、同様の疑問を投げかけたのである。そして 90 年代以降、エクアドルにおいて社会運動といえば先住民運動をさすようになっていく。

> この蜂起は先住民どうしの結束力を高める役割を果たしたことは疑いない・・・分散している先住民組織の多くは、一時的なつながりをもっていたり、あるいはもとからつながりがなかったりしたのだが、それが恒常的な形でエクアドル先住民連盟 CONAIE という全国組織と連携するようになりはじめたのである。ある意味で、次のように言えるのではないだろうか。つまり、誇張のそしりは甘んじて受けるとしても、現在の CONAIE のありようこそ、1990 年蜂起がもたらした最大の成果ではないかということだ（Guerrero y Ospina, 2003: 37）。

1990 年の蜂起の際もその後も、エクアドル先住民連盟 CONAIE の下部組織は CONAIE 幹部に対し自分たちの喫緊の諸問題を解決するべく政府とは恒常的に交渉するよう強くはたらきかけていた。そうやって先住民の指導者たちが公的な政治の舞台に向かう土壌ができていった。1993 年までは選挙参加にともなうリスクの方がより懸念されていたのだが、95 年には機も熟し、選挙参加という方向性はパチャクティック新国家運動（Movimiento Plurinacional Pachakutik-Nuevo País）結成という形で具体化する（cfr. Muñoz, 1999: 42）。

エクアドルでは（軍政から）民主制が復活して以来、多様な先住民の指導者が選挙戦に参入してはいた。とはいえ、そのような例はいずれも組織的な政治参加というわけではなかった。パチャクティック運動創設のさきがけとなったのは 1995 年の国民投票における様々な社会運動の勝利であり、そこで抗議の声をあげていたのは社会保険の民営化や公務員スト罰則化への動きなど、この国において新自由主義的なモデルを強化しようとする多種多様な提案に対してであった。シクスト・ドゥラン・バジェン大統領の提案による国民投票に向けて多様な運動が合流し、「社会運動調整（Coordinadora de Movimientos Sociales）」という器もつくられた。こうして先住民組織だけに限定されない政治的合意の空間が創造されたのである（cfr. Guerrero y Ospina, 2003: 194-195）。

パチャクティック運動は３つの流れが合流して誕生している。まず最初に、アマゾン地域の先住民組織が先住民限定の政治運動をつくっていこうという提案をした点があげられる。次に多民族的な政治運動を旨とするアンデス高地の先住民組織と政治的左翼による問題提起がある。さらに進歩的な傾向をもつ勢力と幅広い同盟関係を結ぼうではないかというエクアドル南部の都市居住者たちの発想もあげることができる。「パチャクティック新国家・複数ネーション・統一運動」（“Movimiento de Unidad Plurinacional Pachakutik-Nuevo País”）という命名が最終的になされているが、この名称はこういった３つの側面を反映したものである（cfr. Guerrero y

Ospina, 2003: 195-196）。

先住民運動にとって、問題はミクロな世界での経験をより広い空間に拡大していくことであった。そこでは新たなタイプの民主主義、つまり先住民の歴史的、文化的な力をとりこんだラディカルな民主主義を構築する実験室として、ローカルな場が特別に扱われていた。*ama shwa*（盗むな）, *ama llulla*（嘘つくな）, *ama killa*（怠けるな）－－その経験の中にはこういった先祖からの教えも含まれている。アンデス共通の合意形成方法にしても、民主的な意志決定メカニズム、紛争解決メカニズムとして郡（canton）レベルの議会・集会では現在も実践されつづけている。同様に、辞職届に早まった署名をしたとしても、下部組織からの委託など自動的になかったことになりうる昔ながらの原則が適用されるにすぎない、というわけである（cfr. Larrea et al., 2000: 3）。

エクアドルにとって 1990 年代とは二重の危機を意味する。独立以来の歴史において前例のないレベルの経済危機、それに政治体制の正統性喪失という政治の危機のことである。この時期は構造調整政策が強引に実施され、すでに民主化の初期から動きが鈍くなっていた土地の再配分プロセスも終わりを迎えていた。

このようなコンテクストのもと、先住民運動は政党システムと伝統的に政治階級と称されてきた集団に対して疑問を投げかけ、政治運動体として選挙戦に突入していった。どちらもエスノセントリックで排他的で、腐敗しているではないかというのである（cfr. Larrea et al., 2000: 3）。最初の選挙キャンペーンでパチャクティック運動が提起したのは新憲法を制定してこの国をつくりなおす必要性であった。「農民の要求は、消されることなく、国民の要望として吸収される」（Guerrero y Ospina, 2003: 39）。

選挙への参加をつうじて先住民運動は新たな挑戦課題を見いだすことになった。複数ネーション、多民族国家という問題提起を土台とする国家プロジェクト構築の必要性である。先住民に限らず、民主的な領域から排除されている社会的集団全体の要求を包み込み、そして表現しうるようなプロジェクトということだ。とくに先住民組織が形になり、成長していったのはローカルな場であったことを考えると、この挑戦はひときわ現実的な重要性を帯びてこよう。「全国レベルで活動するようになるということは、彼らの政治参加が新たな、そして未知の領域に入っていくことを意味していた。そこでは既知の政治活動の道具だては不十分になるし、主だった先住民指導者たちも経験していない領域なのだから」（Guerrero y Ospina, 2003: 212）。

選挙に参加するようになってから、ほぼ 12 年が経過した。とはいえ「多様性の中の統一」を基本方針とする大きな政策プロジェクトが形になったとは言い難い。国内の社会運動をきっかけに様々な流れが合流し、本格的な政策綱領の輪郭が描かれるなど、注目に値する時期が存在したことは確かである。しかし同時に分裂や分断の動きが蔓延する危機的な時期があったこともまた確かなのである。

新憲法を制定してこの国をつくりなおそうという問題提起は 1997 年のアブダラ・ブカラム大統領追放後の政治的アジェンダに含まれている。複数ネーション国家（Estado Plurinacional）宣言を勝ち取ることはかなわなかったにしても、1998 年憲法では先住民の集団的権利やネーション（“nacionalidades”）の自己規定、先住民のテリトリー指定の承認など、様々な要求事項

が認められた。

【公的制度への参加と体制の否定】

承認を要求していく闘争は次のような二つの方法をやりくりしながら進められていった。まず、公的な制度において認められた権力機関を念頭においた問題提起を行うことである。これは先住民向けの特例的な公共政策導入メカニズムとして公的権力を捉えるということだ。もうひとつの方法はこの公的な制度に匹敵するような自治政府を自らつくることである。この二段構えの戦略が傑出した形で示されているのは、先住民・人民議会（Parlamentos Indígenas y Populares）とエクアドル・ネーション人民協議会（Consejo de las Nacionalidades y Pueblos del Ecuador）である。

その先住民・人民議会とは、これまでも対抗的な権力空間をつくりだすべき政治状況では常に設置されてきたものである。ハミル・マワ大統領が追放されていくプロセスにおいても、先住民運動は国家の三権を否定する声をあげていたし、エクアドルの様々な県で先住民議会がつくられていた。そしてその「議会」という名称はうわべだけのものではない。共和国議会と並び立つ権力機構ということなのである。

この対抗権力という戦略と表裏一体になっているのが、公的制度への参加という戦略である。先住民・人民議会の再現をみる２年前、先住民運動はエクアドル・ネーション人民協議会の設立を促した。そして 1998 年、エクアドル内の多様な黒人、先住民関連組織を代表する機関として、この人民協議会という権力機構が政府内に誕生する。そこでは世界銀行からの融資を受けた「先住民・黒人開発プロジェクト（PRODEPINE）」の管理運営がまかされている。2000 年にはエクアドル先住民連盟 CONAIE により、この協議会の再編成が推進されていく。ただしそれは国内のエスニックな諸組織ということではなく、エクアドルの諸国民（las Nacionalidades y Pueblos del Ecuador）を代表する空間に変えていくためのものであった。そのプロセスは全国の先住民組織の間で相当な軋轢を生むことになり、CONAIE 自身にしてもその下部組織を「多様な国民（“pueblos y nacionalidades”）」として再構成するべく、内部の再編成をせまられることになっていった。

先住民運動の戦略の中には、現行の政治システムに対する問いかけ、そして草の根からの新たな複数ネーション国家の構築といった論点が同居している。となれば、次のように要約される二段構えの政治戦略が浮かび上がってくることになる。「政治システムへの参入と、その裏戦略にあたる体制そのものの否定。選挙戦への参加と（中央と地方の公的な権力機構にかかわる）社会的な動員。選挙参加という民主的な路線の拡大と、威信の失墜した体制に対する正面からの厳しい攻撃・・・排他的な制度へのラディカルな批判と、制度上の統治ゲームで定められたルールを守りつつなされる秩序だった参加。同化と抵抗は同一の戦略、同一の政治状況理解から導かれる２つの要素なのである」（Ospina, 2002: 3）。

先住民運動と国家との関係は先住民組織、そして国家そのものの変化をも生みだすことになった。場合により、先住民組織の参加は公職に接近するための踏み台だったのではないかとされることもあり、内部の軋轢は激しさを増し、地方組織は空洞化が進み、同時に「先住民で

あることは、要求を通したり利益を得るのにうまみがある」(Guerrero y Ospina, 2003: 249) といった感覚が広がってもいる。国家の側にしても、先住民に対する特別な政策導入を余儀なくされ、そして何世紀にもわたってないがしろにされてきたこの「文化的な他者」を受け入れるよう、制度を修正しなければならなくなってきている。

【多様な権力への接近ルート】

2000 年、先住民運動はエクアドル国軍の若手大佐グループと同盟関係をむすび、ハミル・マワ大統領の追放という成果をあげた。ただそこで草の根レベルから権力を構築していくのか、あるいは直接権力奪取に向かうのかという論争が起こり、運動内部の緊張が新たに表面化してしまう。とはいえ 2000 年の出来事は地方選挙の運動に向けて大きな追い風となり、1996 年選挙では県レベルではゼロ、市レベルで 11 人だったパチャクティック運動の当選者も 2000 年には県レベルで５人、市レベルでは 21 人にまで増加した。

翌年、先住民運動は新たな蜂起の主役を演じることになり、その蜂起は特別な性格をもっていた。まず第一に、先住民の動員ぶりが卓越していたということがある。全国レベルの先住民組織３団体、つまり以前からそれぞれ別の社会運動との同盟関係をもっていて、お互いの隔たりが際だっていたエクアドル先住民連盟 CONAIE とエクアドル農民・先住民・黒人連盟 FENOCIN（Federación Nacional de Organizaciones Campesinas e Indígenas y Negras del Ecuador）、そしてエクアドル福音先住民連盟 FEINE（Federación Ecuatoriana de Indígenas Evangélicos）、この３つの組織が歴史上はじめて統一行動をとったのである。２番目として、この蜂起には 2000 年の選挙で当選した県知事や市長といった先住民権力者が中心人物として参加していたことがあげられる。３番目の特徴としては、以前の動員では前例のない７人の死者がでてしまうなど、蜂起した先住民が直面せざるをえなかった政府側の強力な弾圧がある。最後に、そしておそらくは最も重要な特徴として、抗議デモにおいて国民的な要求事項が登場したということがあげられよう。そのことの重みは「インディオだけのためでなく “Nada sólo para los indios”」という蜂起スローガンに反映されている（cfr. Guerrero y Ospina, 2003: 236-238）。

パチャクティック運動の選挙戦における勢力拡大、そして 2000 年の１月 21 日蜂起は、2002 年選挙への参加について先住民運動がどういう意思決定をするのか、その際の基盤になったことだろう。確かに、2001 年２月の蜂起は「先住民運動の力をあらためて整え、先住民のタフネスさという一般イメージを修復した。しかし内部の論争を解決するにはいたらなかったのである」(Guerrero y Ospina, 2003: 238)。2002 年、先住民運動内部は深刻な緊張状態にあり、その中でパチャクティック運動は大統領選挙に自前の候補者はたてず、愛国社会党との選挙同盟を頼みとする決定をくだした。

多様な政治的潮流をとりこんだ代替的な政治プロジェクト、それはローカルな場を主たる舞台として構築されてきたものである。そこでは国政レベルの選挙戦略は先住民運動の力を蓄積していく仕掛けとして捉えられていた。つまり、「権力に到達する」ことを問題にしているのではなく、先住民運動の問題提起や経験、提案をエクアドルという国に提示すること、新たな社会をつくるために議論を喚起し、様々な分野との同盟関係を促進していくことを重要視して

いるのである。

2002年の選挙では、先住民運動はその中心となって活動し、ルシオ・グティエレス大佐の予想外の勝利をもたらし、彼を大統領職にまで導いた。「草の根から国家にかかわる提案をしていくという先住民運動の政治戦略はその舞台を移し、確固とした政策綱領も用意できないまま国家レベルの政治に立ち向かわざるをえなくなっている・・・あまりにも急に政権への飛躍をとげたことで、先住民運動はこの社会を変えていくための戦略的問題提起、その中身を洗練させる必要性をつきつけられたのである」(Bonilla y Larrea, 2003: 134)。

先住民運動は6ヶ月にわたって政府の一員でありながら権力はもたないという苦々しい想いを味わうことになるのだが、その中でおそろしく精神を消耗させる論争にも入り込んでいった。それは政権に対して歴史的に首尾一貫した方向づけを与えられるのではないかというものから、抵抗しつつ統治し、統治しつつ抵抗するという問題提起にいたるものである。最終的にパチャクティック運動は政府からの離脱を決め、グティエレス政権に正面から敵対するようになっていく。

グティエレス政権の右傾化、それは先住民運動では「エクアドル国民への背信」と形容され、エクアドルの社会運動が立ち向かわなければならない新たなコンテクストを画することになる。

専制的な性格を明らかに有する新政権はアメリカ合衆国政府にとって最高のパートナーとなり、国際通貨基金の指示を忠実に守る下僕と化してしまった。国内の様々な分野から反対の声がますますあがっているにもかかわらず、グティエレス政権はプラン・コロンビアを通じて国家収入を得るという明確な戦略をたてた。米州自由貿易協定や自由貿易条約の署名に向けての交渉も強力に推進されている。これは主要な公営企業の民営化に資するものであり、実質的にエクアドル国家のエネルギー資源、生物資源をバーゲンセールに提供しているようなものだ。

こうしたことにはすべて反対者の口を封じる抑圧的政策がともなっており、どのようなタイプのものであれ、抵抗する者にはそうした政策が適用されている。2003年の12月にエクアドル・キチュア先住民連盟 ECUARUNARI の会長が投獄されているが、それはグティエレス大統領を「無能で嘘つきで、さらに一貫性がない」と評したことによるものであった。2004年の1月にはガソリンの盗難事件を捜査していたペトロエクアドルの職員が暗殺され、2月にはエクアドル先住民連盟 CONAIE の会長とその家族が暗殺目的の襲撃にみまわれている。3月にはテレビ局の社長に対する殺人未遂事件があり、彼の運転手が殺害された。様々なジャーナリスト、メディアが脅迫されており、エクアドルで最も重要な反政府系ラジオ局「ラ・ルナ」にしても、その周波数割り当ての停止をめぐる裁判が開始されている。その罪状というのは、ECUARUNARI 会長ウンベルト・チョランゴの収監をめぐって、公開市民討論会を開催したことであった。

CONAIE の最高幹部を暗殺しようとしたことは、さらなる軍の動員を招いてもいる。弾圧は絶えることがない。アスアイ県では63歳の先住民が一人殺害され、エクアドル軍はパラモの荒野を焼き払い、先住民がその地を離れざるをえないようしむけた。まったく動物を狩るようなやり方である。

先住民運動、さらにいえばエクアドルの社会運動全体は今まさに正念場を迎えている。新自由主義の拡大傾向はますます強まっているし、政権内部に入る経験を経た先住民運動は再編の時期にきている。その再編成にはある程度の時間がかかるだろうし、先住民運動を分解させようというエクアドル政府が背後で糸を引く動きにも常に脅かされている。さらに次のことにも留意しておく必要があろう。2004 年は選挙の年であり、地方首長の改選選挙があると同時にエクアドル先住民連盟 CONAIE 執行部の改選も予定されている。そのことがますます事態を複雑にさせているのである。

先住民運動がこの 10 年で形にしてきた権力をもつ者としての使命、そこで今日要請されているのはよりシンプルな政治プロジェクトを包括的に構築していくことである。複数ネーション国家という問題提起にはこだわっていくとしても、それで十分とはいえないのである。

与えられた課題は複雑で錯綜している。しかし、これまでに蓄積された教訓をもとに、先住民運動は今後も困難な課題に向かって挑戦していくことであろう。

【参考文献】

Bonilla, Ángel y Larrea, Ana Maria 2003 “La ficción democrática: paradojas en las trincheras del poder”, en *OSAL*（Buenos Aires: CLACSO）Año IV, Nº 10, Enero-abril.

Guerrero, Fernando y Ospina, Pablo 2003 *El poder de la comunidad. Ajuste estructural y movimiento indígena en los Andes ecuatorianos*（Buenos Aires: CLACSO）.

Larrea, Ana María y Muñoz, Juan Pablo 2000 *Los caminos para la construcción de una democracia participativa en Guamote*（Quito: Grupo Democracia y Desarrollo Local, IEE, ODEPLAN）mimeo.

Larrea, Ana María, et al. 2000 *Desarrollo local: Experiencias, tendencias y actores*（Quito:IEE, Terranueva Gestión Social）mimeo.

Muñoz, Juan Pablo 1999 “Indígenas y gobiernos locales: Entre la plurinacionalidad y la ciudadanía cantonal”, en Hidalgo, Mauro et al. *Ciudadanías Emergentes*（Quito: Abya Yala, Grupo Democracia y Desarrollo Local）.

Ospina, Pablo 2002 *Crisis institucional en Ecuador y participación política del movimiento indígena*（Quito: IEE）Proyecto de investigación, mimeo.

原　題：El Movimiento Indígena Ecuatoriano: participación y resistencia.
原著者：Larrea Maldonado, Ana María（Directora del Instituto de Estudios Ecuatorianos［IEE］）.
出　典：*OSAL*（Buenos Aires: CLACSO）Año V, Nº13, Enero-abril 2004, pp.67-76.
＜ http://osal.clacso.org/espanol/html/frevista.html ＞